Title	椎名麟三論(下)：『運河』から『懲役人の告発』まで
Author(s)	西谷，博之
Citation	聖学院大学論叢，15(2)：410-394
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=189
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

椎名麟三論（下）

――『運河』から『懲役人の告発』まで――[1]

西谷博之

一、序

椎名の『美しい女』上梓と共に椎名文学は一応の完成を見たといってよいだろう。『美しい女』は椎名文学の集大成として『中央公論』（昭和三十年五月号～九月号）に載ったものであるが、直ちに単行本として中央公論社から発刊された。『美しい女』は椎名文学の集大成されたものと私は述べたのであるが確かに今までの文学史の常識ではそうなっている。しかもこの作品は昭和三十年度芸術選奨文部大臣賞に輝き選評に「社会の中に誠実に生きようとする平凡人の原型を平易な文体で見事に摘出、戦後文学に新しい人間像をもたらした。」とあり、それを椎名が受け入れたということは、確かにその通りなのであろう。しかし、私には大きな不満がある。元来椎名麟三くらい〈自由〉〈ほんとうの自由〉を求めた作家はいないのは周知の事実であるが「あの初期作品にみなぎる鋭い緊張感やエネルギーを失った」[2]という観方も多いのは事実である。つまり椎名は昭和二十五年十二月受洗するのであるが、この受洗と共に作品のキレ味が鈍ったというのである。初期の長篇である『その日まで』（四〇〇字詰原稿用紙にて）三六八枚の長篇を一気に読んで了えたのは何も初期作品だからという理由だけではない。何かいうに云われぬ雰囲気があってのことである。ただこの作品が椎名の代表作にならなかったのはあくまでも（私の独断と偏見であるが）当時のキリスト教と共産党との（下部組織者ではあるが）直接対決があるからだと思う。

『美しい女』を書き上げた椎名は長篇『運河』を書き上げる。『運河』がまた問題作である。評論家の佐々木啓一（椎名麟三研究 増補改訂版 冬樹社（昭和五十四年四月））などはこの『運河』を取り上げ「椎名文学における神不在の世界と自己解体の意味」なる一章を別に設けているくらいである。この『運河』について詳しく観てみたい。『運河』は『新潮』（昭和三十年十月号から昭和三十一年三月号）に連載され、三十一年五月に『運河』として発刊された。この作品は彼の「質疑応答」

『群像』（昭和三十一年九月号）にもあるように「ユダとしての自分をえがいた」椎名の唯一の小説である。「ユダとしての自分を描」くとは思い切ったことを言ったものと思うが、ユダを完璧に描くことができたら、神も描けるのではないかというのが私の意見であるが、椎名の場合はたしてどうか。佐々木啓一は『運河』の主人公塚口洗吉を椎名自身に見立て「ユダとしての自分をえがいた」という言葉から「神不在の世界」という一章をものにしたと思われる。それはそれで良いのであるが、この場合本当に「神不在の世界」なのか徹底的に検討して見る必要がある。

『運河』の主人公二十四歳の塚口洗吉は大阪刑務所を放り出され、未知の東京へ出て来て運送店へ勤める。その運送店も主人の妻との折り合いが悪く勤めたばかりなのに、やめる破目になる。彼には共産党員だった過去があり、挙げられて刑務所に入り二年ほどして自分と仲間を裏切り転向上申書を出して執行猶予のお情けにありついたのである。しかし、彼の転向は問題があり、刑を短かくするための上申書であり、明確に〜から〜へ転向するという実の無いもので、このことは後に特高の笑い草となった。また彼の場合、全て新しい住所は警察へ届けることになっていたのだがそれを怠ったために、最初の勤め先も特高が乗り込み、それが主人の妻の逆麟に触れたという訳である。

次から次へ勤め口がある時代ではない。洗吉のような特殊な人間はそれでなくとも勤め口は無い。しかし、洗吉は食わねばならない。売り物は彼の〈若さ〉だけである。手袋を落としたのを注意してくれただけという年上の二十七、八の女鈴木正子に近づき彼女を恋人にした彼は時折、訳の分からぬことを呟く。〈一か八かだ〉と。彼は警察で拷問に会い、「死ぬよりは白状した方がいい」と思い、「おれは、結局、もともとどうしようもない卑劣な人間なのだ」という思いのままに上京したのである。

そのような彼が鈴木正子の家（下が四畳半と三畳、二階が四畳半と物置き）の九人家族の一員となったのである。また正子を騙し「正子の家の人々をだまし」続けている彼の胸に去来するのは「どうしておれは生きていなければならないんだろう」という疑いだった。正子には以前医学生の夫がいた。そのときから「愛は神聖なり」ということが正子にはこびりついていた。その神聖な愛という言葉を使って洗吉は正子を騙すのである。当時洗吉はダイヤモンド製法に凝っていた。

いつもと同じように、繊維をアルカリや酸でこわしはじめた。（繊維を融かすアルカリや硫酸は正子から勤務先の会社を通して無料で持って来させた。西谷注）もちろん、微細なものにしろ、いままでの実験的に成功したダイヤモンドの製法は、高温や高圧などを必要としたにちがいないことは容易に想像された。ダイヤモンド製造の不可能を破るには、温度にしろ、圧力にしろ高々温、高々圧とでもいうそんな異常さが必要なのだと彼に思われたのである。だが、残念なことに、彼にはそんな設備をする知識も金も心の余裕もなかったのである。（『運河』）

正子も正子の一家も洗吉の実験には全く無関心であった。洗吉としては、ダイヤモンド製法に全く無関心である以上「食うために」ダイヤモンド製法の実験を続けることはできない。しかも彼自身、いくらその実験を続けても絶対にダイヤモンドは出来ないと知ってやっているのである。こうなった以上、いやでも洗吉に残された唯一の手段〈若さ〉を使う以外ないことになる。洗吉はまた〈一か八かだ〉ということばを呟く。そして遂に正子に云う。「ぼくは愛しているんです」と。正子を完全に〈もの〉にした洗吉は当初の目的である「彼がそこだけは安全な家のような心であり、そしてそこで眠れるような肉体」を手に入れることができたのである。

この『運河』は昭和三十一年の作であるから椎名が受洗してから約六年経つ。椎名自身「質疑応答」の中で「あの『運河』ではユダとしての自分をえがいたのです。」と明言している。高戸要の言によれば、[3] 椎名自身「恥ずかしくて隠しておきたいことを出せるようになった」のが『運河』のモチーフであるようだが、それではユダと洗吉はどのように違うのか。

聖書は裏切りを最大の悪と見る。このことは今も昔も変わらない。洗吉とユダの最も違う点は洗吉が最初から謝まっていることである。

「おれは、結局、もともと、どうしようもない卑劣な人間なのだ」「こうなるはずだったんだ」「裏切者め」「すみません」「実際、おれというやつは、何ていやなやつだ」「おれは正当な人間じゃないんだ。」「ひどくうらぶれた罪の感じに襲われていた。」「馬鹿だよ。あの女は、おれ見たいな男に」洗吉の自分を貶める言葉を拾って見たが、まだまだこんなものではない。ユダの場合、反省の言葉はない。そして銀貨三十枚と共に自殺する。神は黙って見ている。洗吉の「神不在」は論者の早とちりであり椎名の言「ユダとしての自分をえがく」という言葉に引きづられたと見るのである。

こう書いてくると、「何をやっても許される」という椎名のことばが甦ってくるが私は何も人に対する裏切りを正当化するつもりはない。裏切りは裏切りで悪いのは当然である。しかし、元共産党員は自分ほど悪いものはないと最初から謝っているのだ。こういう人間を誰れが裁くことができるのか。

洗吉は最後にもう一度命の恩人である正子を裏切る。しかも正子が絶対神聖視していた恋愛ということばの元に。「彼は、鈴子と目黒のアパートへ駆け落ちしていたのだった。」これが、椎名描くところの『運河』の結末である。鈴子とは煎餅屋の娘で正子の下、長男敬治の恋人である。敬治は洗吉より一歳年下で肩幅の頑丈な会社員である。その鈴子が洗吉に最初に言ったことばは「お父さんいっていたわ、赤は人殺しよりわるいんだって」である。鈴子に洗吉の過去を告げたのは誰か。洗吉の必死の調べにもかかわらず犯人は特定できない。一番心配した正子は「あっけらかん」としている。洗吉が赤だったことに対して鈍感なのである。この『運河』と直前に書かれた『美しい女』を比較して見ると分るのだが、椎名は『美しい女』は書き倦ね、『運河』は一気呵成に書いたような印象を受ける。それだけ『運河』には勢いが

ある。少なくとも傍目からはそう思えるのである。『美しい女』もこの作品も約半年に渡り、文芸雑誌に連載されたものであるが、作家にとっては何かを我慢しながら書くのと、普段気になっていることを書くのでは、普通の人間でもその差は歴然としているだろう。

『運河』を書いた後、椎名の長篇は昭和三十五年の『罠と毒』、翌三十六年の『長い谷間』であるが、身体を壊わしたこともあって、共に見るべきものはない。『懲役人の告発』まで椎名は何をしていたかとなるが、短篇小説、エッセイ、そして戯曲を書くことにのめり込んで行く。椎名の持ち味はなんといっても長編小説にある。決して戯曲や放送脚本ではない。仮令昭和三十五年度『自由への証言』で芸術祭奨励賞に輝いたとしても、それは単に戯曲も書けるというに過ぎない。

二、懲役人の告発

『懲役人の告発』は昭和四十四年八月三〇日書き下ろし作品として新潮社から出版された。本人の心臓病のためもあるが、『長い谷間』から数えて八年後の長篇であり椎名麟三の最後の長篇小説となった。この小説ができあがるまでの経緯については椎名麟三全集二十一巻の斎藤末広の解題に詳しい。なおこの巻の解説は野間宏である。彼は全て『懲役人の告発』に当てている。これも見事である。但し『懲役人の告発』は今から三十三年前の発刊であり、この全集で読めるようになってからでも二十五年経つ。この小説は全体が六章からなっており、主人公は田原長作二十四歳である。

1章

父長太郎五十四歳、継母すえ五十五歳（もと料理屋のおかみ）、叔父長次五〇歳、叔母君江三十五歳、福子十二歳（継母すえの連れ子だが、三歳のときから君江に育てられている。美少女）

長作は叔父の経営する町工場の工員である。彼は福子と同じ年の女の子を「友人から譲り受けたばかりの小型トラックで撥ねて殺し」懲役四ヶ月、三ヶ月で仮釈放になるも、補償金が示談で三〇〇万、五分の一の六〇万は退職金で返したが刑が終わっても毎月一万円は支払わねばならず終わるまで二十年はかかる見込みである。それなのに父親は家に入れる金を二万五千円から三万円にしろという。継母すえは長作のために朝食を作るなどは一切せず朝寝をしているのだ。父から命じられた給料値上げ交渉は失敗するどころか逆に三千円減らされることになる。長作は何やかや物入りなのに憂鬱である。もう一つこれが最大の鬱の原因かも知れないことに、会社の近くに墓場があり、首の無い黒い犬が出るという。その首の無い黒い犬に長作は突然会って了うのだ。長太郎は弟長次を非難し「人生の究極は無なんやぞ。すべては無。おごる平家は久しからず」という。しかし、長作は「おれは生き生きと生きたい」と思い「こんな懲役人のような暮らし」はつくづくいやだと思う。

2章

長作は長太郎に朝の五時過ぎたばかりにたたき起こされる。長次の寝込みを襲うというのがその理由である。長作はメリヤスのまま寝ていて一ヶ月以上洗濯していない。刑務所の習慣が今に到っているのだ。珍らしく高校受験の弟稔が長作の前に立ち塞がり長作を詰問する。長作は稔が受験勉強に追いつめられたと思い、一瞬同情するが、稔は追いつめられても死ぬことはあるまいと思うのである。

長作は仲々繊細な神経を持っている。真夜トイレで用を足すときも音が漏れないように気をつかうが、継母のすえはどんな場合でも長作とは口をきかず長太郎を通して会話をする。背広姿の長太郎を見て「おれはやっと歩き出」すのだ。弟の稔は今朝全世界を否定すると言ったが、長作は全てから否定されていると思う。「このおれを生き生き生かしてくれるもの、このおれにとって失うことのできないもの、それを見つけなければ駄目なのだ」「たしかにおれには絶対的なものはない」と長作は考える。

「たたかいやあ。たたかいやあ。何としてもたたかいやあ」親父の呟きは列車の轟音と共に消えて了う。「あの鉄のかたまりの轟音は、おやじのなかの空虚でも引き出したようだった。」親父の足が突然とまる。親父は、又動き出す。「きっとあのすえがおやじを動かしたのだ。」―結局、首のない黒い犬は現われなかった。おやじと共に長作は、長次の家に上がった。おやじは早速、長作の減給問題をとり上げる。しかし、両者はかみ合わない。そこに福子が真裸であらわれる。彼女の姿は少女の身体でもなく、大人の身体でもなかった。「この子は、真冬でも真裸で寝るんやで」「長次は、楽しんでいるふう」だった。長作は、おやじと長次の間で生き方が根本的にくい違い、福子を中心にして「何か陰湿な争いが」始まったのを感じ事務所を抜け出す。おやじと長次の話し合いは有耶無耶に終わった筈なのに長太郎の機嫌はすこぶる良い。福子が五万六千円くれたという。福子はきちんと服を着ており、君江も挨拶したという。おやじの福子絶賛はとどまるところを知らない。福子は寝ていて、長太郎に心から同情したという話をきき長作は福子に心なんかあるものかと思い食堂に行く。食堂は日曜日であるのに混んでいる。長作は「飯と墓場しかない」自分の存在の矛盾に気付き、許しがたいほどのおかしさを感じた。

外へ出た途端、長作は声をかけられる。一人の男が彼を待ち受け喫茶店に誘う。彼は仕方なく紅茶を頼む。男は宇川といい、長次にバーで世話になっていると言い、流しのヴァイオリン弾きで長次の女について尋ねる。長次の女はすごい美人で本人の生きがいでもあるという。長作はすぐ福子の顔を思い出したが福子はまだ少女である。もし長次の女が福子であるとしたら、長次には長作の伺うことのできない「底知れない冷淡なものがある」ような気がしたのである。家に帰ってきた長作はもっと寝ていたいのに肉体が長作も起こして了う。長作は自分の肉体にさえ絶対性を持つことができない。これでは又食堂に行かざるを得ない。そのように思いながら長々と放尿する。刑務所にいたとき教誨師がやって来て神に祈れと言う。「小便をするときしか祈れな

いとおれが答えた」途端、彼は怒った。店の長太郎はあくまで上機嫌で「少し手つだえ！」と言う。おれが一度も聞いたことのない言葉を発するおやじ。「おれはこの家でも、ひとりぼっちのはずなんやけどなあ」と思わず言って了う長作。おやじの石のような挙固を貰いこめかみを押えて食堂に行く。昼は流石に混んでいない。彼はカレーライスで胃の腑を満たした。

君江に呼び止められ福子のメンスがあったのでお祝いをするという。そのための買出しである。君江の姿を見失った長作は、荷物を持ったまま四つ角にぼんやり立っていると会社の名前を聞く二十四、五の女性がいる。長次の何番目かの女らしい。「社長はん、K郡に家新築してそこへ女をかこうという話、ほんま？」と尋ねる。何を聴かれても満足の行く答えを得られなかった女は「社長に会ったらいうといて。うち、自殺してやるさかいにと、恵美子という女がいうとったって。」の捨て科白と共に奥へ行って了った。漸く君江が現れ、四つ角に立つ長作に声をかける。「さあ、急いで帰るんや。」

3章

長作は長次の家の玄関の隅に二時間以上腰かけて待っていた。誰も来なかった。長作に待つものはない。それなのに何故待つことができるのか。それは長作が「ぼんやりした空虚のなかに住んでいるせい」だといえる。帰ろうと思った時、君江の声がした。

長作は素直に茶の間に上がり隅に座った。福子は卓袱台に向って座わり、振袖姿で化粧していた。長作は一瞬昼の女を思い出したが、女が長次にあてつけで自殺するなどということは黙っているつもりであった。自殺などしてもしなくても長次には無駄であると思っていた。福子は君江の宝石箱をパチン、パチンと閉めたり開けたりしていた。君江が嬉しそうに福子に足をかまれたと悲鳴を上げた。細川が入って来て福子に祝いの言葉を述べる。途端に福子の唾が細川の袖にかかる。次の被害者は長作である。福子の唾が肩にかかると長作は「今日の唾は生臭いや」という。その言葉に怯んだ福子は座敷の方へ入って行った。細川が相変らず長作を無視して長次と一緒に座敷へ入った。君江に呼ばれても長作は動かなかった。長次の許可が無かったからである。長作は「昔のあの愛や憎しみにあふれた自分」を思い「生命感の充実したあの生の激情」を思い「そういった自分とは切断機で切り落されてしまっ」ているのだと思う。長次の許可は君江が取っていた。

「細川君、こんなことで祝いごとなんて大仰なことや。」と長次は言い、次に細川も身内と思っているから呼んだとの言に、支配人格の細川は大袈裟に感激して見せる。『彼は、「社長！」と叫ぶなり、長次の左手を両手で握りしめたのである。眼から水が流れていた。』「わたしを認めて下さったのは社長だけです。」の細川のことばと共に福子が今度は長次の腕にかみつく。長次は今まで誰にも見せたことのない怒りの表情を見せた。怒りは一瞬にして消えたが青い顔で福子に言う。「まるで野良犬やな。ほんとは何をしてええのか、わからんようになっているんやろ」と。

玄関のブザーが鳴りおやじが入って来た。おやじは長作など眼にも入らず皆が何をしているのか理解に苦しむ。「福子の女になった祝いでな」という長次のことばにも長太郎はあぐらを組んだり正座になったり、又あぐらになったりした。長作にぺこりと頭を下げ長作の横に座った途端自分の息子も来ていることに気がついたのである。長作にビールを要求し、おやじは酒を飲めないのに、彼は水と間違えているように一気に音をたてて飲み干したので長作は再び注いでやると今度は両手がコップへへばり付いた儘になった。そして「長次！　福子をかえしてくれ！」と興奮した声で言った。長太郎は呟くように言う。あの娘はわしの「生き甲斐なんや。頼むさかい、福子さんを返してくれへんやろか」長次は答える。「ところが、まことに申しわけあらへんけど、福子はおれの生き甲斐でもあるんや」

長作はずっと気になっていることを長次に尋ねた。「首のない黒い犬ということでっけど」「そんなもん迷信や」これが長次の答えだった。長作は福子に首筋をかまれる。「しかも彼女が懸命になっているのがわか」る。長作は黒い犬のことを思い我慢した。福子が叫ぶ。「キス・マークや。キス・マークがはっきりできとるんや」細川が福子に追従して言う。「ほんまのキス・マークでんな」福子は言う。「うちのほんまにしたいことて、ほんまになんやろなあ」それを聴いた一瞬長作は彼女に愛を感じた。

4章

おやじと長作は一緒に長次の家に向かった。朝食堂から出て来た長作に驚きながらも上機嫌な声で言う。「ほんまに福子はいい子やで」「わしはなあ、いままで死んだような人間だった。それが福子によって生きかえったんや」長作より一足先に長次の家に着いたおやじに玄関の方から君江の声がする。「ほんまに帰っとくなはれ！　主人も昨日、もう来るなといいはりましたやろ」おやじは「拒絶をあてにしながら来たにちがいない。」と長作は考える。昼休み、細川に呼ばれて事務所に入った長作は長次が空気銃の銃口を向けていたので思わず怯んだ。長次が言う。「おれはゴルフもやらない。猟銃もそや」「おれにはおれの気持もあり主張もある。しかしみんなが反対と見たら、おれはすぐみんなの方の味方をすることにきめてるんや」「お前のおやじと来たら気ちがいや」といって今度来たら殺して了うと俺が言ったと伝えろ、という。細川がにやりと笑った。

長作は職場に帰り遅い昼食をとる。職場の仲間は本当の仲間ではない。彼等が長作を疎外しているのだ。高速切断機もそうだ。昔はもっと良い関係だった。長次が独言のように兄貴はどこまでも俺に敵対するつもりだ。福子を守るため三日でいいから車で学校へ送り迎えするんだということを一人で決めるように言う。俺は播州製罐へ就職したのであって社長の娘を守るためというのは公私混同ではないかと思い、その話をつけるために長次の事務所へ入ったのだが、逆に細川から会社が絶対絶命の危機にあることを知らされる。長作は絶体絶命は長次

であり、長次の女ではないかとふと思う。

四つ角でビラ配りをする宇川に出合う。長作はびっくりして宇川に聴く。「宇川さんはクリスチャン」と。ビラは粗末なものであったがS町教会の伝導集会の案内であった。ちがうというのが宇川の答えであり、少しばかり人生を愛しているからというのが彼の返事だった。宇川は昨日の日曜日社長に飲まされた話をし「この社長さんもつくづく不幸な人なんだなと思ったからだよ。生きすぎている人はみんな不幸だけどね。君は少し死にすぎている」確かに長作は死んだような仕方で生きようとしている人間であった。

家へ帰ると彼はおやじに言う。以前のおやじはすぐ死ぬ、死ぬと言ったが今は言わない。大事なものを飛び越えて急に意見を変えるのは何か怪しい。そう言って彼は自分の部屋に入り忽ち眠った。すえの声高の声と君江の論争に目を覚ました。五メートルも離れているが良く聴こえる。元料理屋のおかみを相手にいくら社長の奥さんでも立ち打ちできない。辛うじて長次の名を出してその場を切り抜けた君江は飛び出して行く。

福子をシートに座らせると十二歳なのに意外な体重の重みがあった。突然彼の左手の甲に福子が噛みつく。彼はブレーキを踏む。福子が噛んだからではない。「遮断機の前に列車が鋼鉄の重いひびきをあげながら通って」いたからである。そして首のない黒い犬。まだ朝だというのに列車の車輪の間を走っていたのだ。その踏切りを渡ると車は徐行せざるを得ない。一車線であるのに加え、学校まで商店と住居が両側に並んでいるからである。福子が突然アクセルを踏んだ。車はジグザグに進みそれでも六十キロを越えた。学校につくと長作の何かが彼の「制御からとび出して、まだシートにかかっていた彼女の右手」を長作「の歯がつよく噛ん」だ。いわゆる噛み返したのである。

長作が福子を学校に迎えに行くと、おやじが校門のところで見張っていた。そのおやじの目前に車をのり上げて長作は言う。もう少しで「おやじさんを殺すとこやったなあ」と。福子を車に乗せると当然のことに朝の話の蒸し返しになった。何故誰もしないのに長作だけが噛み返したのかと。長作は首の無い黒い犬を見たせいかも知れぬとごまかした。その所為で長作は福子を墓に案内する。福子はまだ十二歳の少女である。深く考えない。車で道路へ出た途端顔と顔がぶつかった。福子は言う。大人のキスをしたと。

会社へ帰ると細川が嬉しそうに言った。「やっぱり三千円ひかれてまんな」山陽線で夜食の代わり駅弁を食う。八時過ぎ大阪に着き京橋で降り轢き殺した娘のアパートに行く。焼香しようにも線香立てさえ無く写真も飾ってある一枚きりだという。長作は「あの少女を失ってしまったような底知れない空虚を感じ」外へ出た。次に〇町の当時つきあっていた彼女を訪ねた。彼女は居た。しかし、彼には余所余所しかった。「いまグループサウンズのKさんとつきおうとるんや。テレビによう出てはる」「あんたは死んだような人になってしもてる。うちそんなん、好かん。ほんまに早う帰って」長作は彼女と何十回寝たろうという考えと共に、肉体関係のもつ儚さを身に沁みて感じた。

5章

例のように福子を車に乗せて学校に行く途中、福子は言う。「好きというて」「むろん好きや」長作はよどみながら答える。福子を学校に届けると「これでおれの仕事はすんだのだ」と工場へ引き返す。君江が入口に立ち三枚の千円札を長作へ差し出す。君江の言では長作は給料から三千円引かれて怒っている筈だから返すという。そして福子をあくまで守って欲しいという。彼はまた学校に引き返す。福子が来るまで五時間は待たねばならないだろう。しかし彼は何ヶ月も待ったのだ。毎日、毎日自由を願いながら。出獄して見ればシャバには自由などなかった。待っていたのは懲役人のような生活だった。自動車で待つというのも危険である。巡査に見つかってしまう。一度は上手くごまかしたが、長作はつくづく待つということは時には危険であることが身に沁みた。

福子は忽然と消えた。長作は車を運転しながら捜査願いを出すように君江に言い、自分は下手に動くと運転免許が無いから逆に逮捕される恐れがあることを説明した。長作が一度書いた辞職届を引き裂いたのには理由がある。あくまで工場に就職したのであって社長の私的な事柄に関しではない。しかし考えて見ると福子を守ることに失敗し無免許運転もそのうちばれるだろう。警察の尋問の時一人の警官が長作におやじと共犯でないことを確かめ警部と共に出ていった。そのとき長作の心の中に「あの首のない黒い犬が」通り抜けた。「あの黒い犬と対立することだ。逃げてばかりいないで。あいつをふんづかまえて蹴とばしてやることだ」ここは墓ではなく工場なのに首の無い黒い犬が跳んだり寝ころがったりしているのだ。黒い犬の存在は長作にも本当には信じ切れない。まして仲間の誰も信じてはくれまい。それはおれの存在全体を暗い空虚なものにする。家に帰る途中、病気ではなく真暗な墓場に入った。黒い犬は自分の心の投影かも知れない。いたら奴と戦うだけだ。しかし坂道をのぼるにつれ恐怖心と戦わねばならなくなった。彼は深呼吸をし屈身体操をしたが刑務所で強制されたものなので長く続かなかった。

突然、長作は福子と一緒にここにいたことを思い出し彼女に対する愛を感じた。彼は酒が飲めない体質なのに無性に酒を飲みたくなった。が長作に出来たことは食堂の狭い床几に腰を下ろすことだった。食堂から駅に向った。その駅で宇川に会う。宇川は友人を東京へ送り出すためにやって来たのだ。宇川の話では長作のおやじが福子を連れて歩いている所を見たという。しかし長作が心配するのはお可笑いと宇川は言う。そう宇川に言われて彼もお可笑いと思う。家に帰っても稔もすえも居なかった。ぐっすりと肉体が眠り、次の朝潜り戸の所で堀川しげ子の速達を見い出した。グループサウンズのKとは二回会ったに過ぎないこと、できたら昔の仲をとり戻したいことが書かれていたが、長作には過去のくり返しは不可能なのだ。手紙は食堂の近くのゴミ箱に捨てた。

工場へ行くと細川が長作の顔を窺うように「とうはんな、帰って来はったんや」と言う。君江が福子がおやじに手ごめにされて血を流し

ているから産婦人科に連れて行って手術して来て欲しいと告げる。長作はおやじがそこまでつっ走ってしまったのかと暗然とした。病院から戻ると長次は富山から飛行機で帰っていた。そして福子に今度の日曜日からK郡の家へ行くように言う。転校手続きは全てやってやるし、今までのように勝手気儘にしていいという。

6章

たそがれ、墓場の近くでおやじに会う。おやじは刑事が張っている家からどうして持ち出したのか知らないが冬のオーバーを着ていた。長作はおやじのいい訳に頽廃した老人を感じただけだった。ただ今度のおやじの事件の背後に、おやじの生涯の不幸全体を十分感じておりおやじに言う。叔父の長次が誘拐の方は仕方が無いが強姦の方は親告罪だからこちらからは訴えないといっていたと告げた。長作は父の刑が四、五年はかかるものと予想し、福子も一六・七歳になったら、断わられるかも知れないが彼女に結婚を申込むつもりであると言った。長作にはおやじの「生き方に対するつよい拒絶と反抗があった」、「第一、親子関係を打ちこわして来たのはおやじではないか」彼が家に帰るとすえが刑事にお愛想していた。

翌日会社に出ると長次が見つけたという家の広告が四つ折りになって卓の上にのっていた。長次は長作にその広告の裏に書かれた下手な文字を見るように強請した。慌てて見るとそこには「人生万歳！人類万歳！福子さん万歳！」という文字があった。長次の説明によると、兄貴がもう死ぬ、死よ万歳というのが無いだけだという。長次の運転で山陽線ぞいの国道へ出る。長次、福子、長作の三人である。K郡の家へ行くのだ。K郡の家はボロ家どころではなく、最近手入れされ新しい離れまで造られていた。びっこの老人は弘志という斜頸で知恵遅れの子供を連れていた。娘の遺児だという。福子は傷跡が痛むのか歩けないという。背負おうとして長作が背を向けても彼女の両眼の水は一層多量に流れるのだ。彼は咄嗟に彼女の唇に自分の唇をあてた。彼女は唾液が多すぎるのだ。やっと唇を離して手で拭いた。すると彼女の身体は背中に倒れて来たのでゆっくり歩いた。大阪で殺した娘を思い出した。長次が長作に福子の世話女房にいいと言うのを聞いて一瞬手が止まったが、福子をコタツに入れた。

長作が外に出ると一ヶ所異様な風景が眼についた。清造の説明では、そこには焼場があって松林があったが、全部マツクイムシにやられて、その跡が何百本となく銀黒色に光りながら立っているのだという。長次は長作に儀礼的に「飲むか」と聞き福子は痛みどめが利いたのか「飲む」というなりハイボールを水を飲むように空けた。次の濃いハイボールを飲んだ福子は突然笑い出した。「全くその笑いには、この世のものでない異様な幸福感さえただよっているのを感じた」「福子はいい人間なのだ」福子は清造によって寝かしつけられた。長次は一言、あれが自由の限界だと言う。納戸の方で電話に出ていた長次が足早にやってきて長作に告げた。「お前のおやじは、やはり死んでやがったよ」長作は「そんなはずないのに」と思いながら「おやじの死にショックを受

けていた」「しかし、現実感は稀薄だった」「ただ」長作は「おやじのいやらしさを感じつづけて」おり「おやじは人間として大切な一線を越えてしまったのだ。」「自由な福子をあまり神聖なものとしたこと、その過度が問題なのである。」

長次がいつもの空気銃を持っていて「やってしもうたよ」という。「裸の福子のな、左の乳房の下二センチ、冷たい銃口が肌にふれないように正確に五ミリはなして、引金を引いた。」長作は「福子の部屋へとび込んだ。」「福子のかつて口にしていた生きた血が、向う側の左乳房から脇腹の方へ一筋流れていた。」これらを見て長作は「思わず自分でも情けないと思われる声を出していた。」「長次の声がした瞬間、彼の頬は音をたて、彼の身体はよろめいていた。長作は長い間忘れていた激情が蘇ってくるのを感じた。その時、彼は福子への愛をはっきり感じていた。」のである。「葬式は当然淋しいものになって了った。」長作と和尚と弘志の三人だけの葬式である。君江も居ない。はっきりしているのは福子の死により長作の生活が変わることだけは決定的であった。お通夜も告別式もない葬式である。6章の最終部分は次のようになっている。

和尚はしばらくだまっているが、やっとまたお経を続ける。しかしそのお経のとぎれたあたりで、またもや弘志の間のびした疳高い声が調子をとるのだ。

ソーレン、カーン

（中略）だがおれは重く曇った空が、立ち枯れして死んだ真黒な木々の何百本という槍のようにとがった梢に、鋭くつき刺されているのを見ていたのである。（『懲役人の告発』）

注

福子は早生れの十二歳で美少女である。冬でも素裸で寝る習慣があり、長太郎の妻のすえの連れ子であった。それが長次の娘となっているのには訳があり、長太郎夫妻が愛情不足により福子を手離したと思われるのである。（注 西谷）

三、本当の自由

長次は、清造の料理を誉め戦争中は古参の伍長殿だったからずい分いじめられたと言い、長作に向って「ええか、福子に何をしてもええと許したのは、その自由（本当の自由—注西谷）を見たかったさかいや。それを見て、ああ、人間って何というええもんやろという思いをな、一度でもしたかったんや。だが、人間の自由って限界のあることは百も承知や。そやさかい、おれは福子を見るたびにだんだん皮肉になってゆきよったんやな。」と言った。長次は自分で「たしかに酔うとるな」というほどに酔っていた。アルコールが「彼の足から力を抜いていた」のである。そして清造に向い、「お前はくらい込んでからえらい苦労した。一人娘は男のわからん子をひとり残して、五、六年前に

死ぬし、千日前でポン引きやっとったお前に会わなんだら、お前は今頃どうなっとるかわかるか」と言う。清造は生真面目に「何しろうすのろの孫をかかえてまっさかいなあ」「毎日、死んだ方がええんやあらへんのかと思うてました」と答える。長次はおいかぶせる様に「いや、そんなに苦労させているお前の人生というもんやな、生きるねうち、あるもんやと思うとるのかと聞いとるんや」と尋ね、次に「長作、お前はどうなんや」と聴く。清造も長作の自分の人生には否定的である。「阿呆！」と長次はいきり立ち、「死んだやつが、後悔したり、生きていた方がましやと考えたりするもんか。とにかく二人ともまちごうとる。」といい長作に向っては「お前のおやじは無というようなむつかしげなことというたな。おれより上の学校へ行っていると思いやがって。だがな、そんなとこで人間生きて行けるかい。そこで生きるためには、もう一つ大切なもんが必要なんや。うん、そいつがなければ絶対あかんのや。三日前にさとったということはそのことや」といいながらコップを彼に投げつけた。長次が最後まで言わなかったのは他でもない。五十にもなって、三日前まで気付かなかったというその言葉、「本当の自由」、もっと分り易く言えば〈神様〉と素直に言えば済むことである。それが出来ないために多くの人間は苦労する。長次は喉元まで出かかった言葉を飲みこみ、てれくささのために急に「おれは寝る！」と言ったものらしい。

全篇の主要モチーフとなっている「懲役人」の生活とは何であろうか。椎名自身一章から六章を通じて微妙に変っている。それを今上げて見たい。

1章最後……しかしおれのなかに首のない黒い犬が住んでいようと、おれは生き生きと生きたいのだ。こんな懲役人のような暮しから逃げ出したいのだ。このような生活は全く楽なものじゃないからな。原典P24

2章中頃……『死んだように生きる生き方もあるのかも知れない。』「全く懲役人のような暮しは死んだような生き方である筈はない。」原典P42

4章中頃……「死んだような仕方で生きようとしている人間にとって、そんな場所なんかないはずだからだ。」原典P93

5章中頃……「積極的に死んだような仕方で生きようとしているおれの折角の決心さえ、手ごたえのない何の意味もないものにしてしまう。」原典P138

6章終わり頃……「全く死んでいるような仕方でしか生きることのできないおれにとって、答えがあるはずはなかったからだ。」原典P184

二章までは明確に「懲役人の生活は死んだように生きることではない」と椎名自身も言っているのだが、四章からは「死んだような生き方」を積極的に取るようになる。どこで変ったのか。その秘密は三章にあると思う。三章には懲役人の生き方とか死んだように生きるなど

の言葉は一行もない。十二歳の〈福子〉の初めての〈生理〉の祝いの場であり、長作が福子に初めて愛を感じた場面でもある。彼はそれまで〈福子〉に対して何も感じなかった。社長の娘であり、自由気儘に育っているお嬢さんに過ぎなかった。福子は人に噛み付くのが得意で、また唾を引っ掛けるのが趣味の十二歳の少女である。社長の娘ということで社員一同唯唯諾諾として従って来た気配がある。寧ろ、自由に文句を言うのは長作である。

長太郎は福子を凌辱した。〈おやじ〉に対し「いやらしさを感じていた」とあるが、それ以上に福子を愛することにおいて〈おやじ〉は長作のキューピッド役を演じたのである。おやじは〈本当の自由〉と錯覚して、即自である福子に対して対自である長太郎は愛を感じた。その愛に自ら溺れる事によって自分は救われると思ったのかも知れない。いわば倒錯した愛、もっと言えば愛の誤解である。福子が大人だったらその倒錯を躱すことが出来たかも知れない。しかし福子はまだ十二歳の少女である。まず長太郎の誤解を解くことはできないであろう。それまで死んだようなおやじが福子に愛を感じるようになって妙に生き生きとしてきたのである。〈福子〉は自分の生きがいであるとまで言い出す。その福子を殺すに到った長次は、親子ではあるが血の繋っていない福子より、実際の兄の自殺に衝撃を受け、自分の今なさねばならぬことは、兄の罪を償うことと決めて自ら制度としての牢獄に入って了う。

後に残された長作の運命は確実に変わる。先ず就職先を変わるだろう。そして次にどうするか。福子と一緒に居るならば黒い首の無い犬（虚無）に対抗することもできたろうが今となってはそれも詮ないこととあきらめるより仕方がないだろう。次に厳しい運命が待ちかまえている。福子のような存在はまず居ないに違いない。一生待っても得られないだろう。ということは、今後一生の間主人公長作は首の無い黒い犬（虚無）に対処しなければならないことになる。それを椎名は神不在を自ら宣言する気持で目指したのだと思う。キリスト教既知の信者にとっては、神など居ないといっても通用するかも知れないが、キリスト教未知の者にとっては、椎名にとってのドストエフスキーのような役目をする人間がいるとは到底考えられないのである。

四、『懲役人の告発』は何を告発しているのか

これまで椎名麟三の作品は、誤解に次ぐ誤解が重ねられ、椎名の作品は難解であるという評を創ってきたが、彼自身も評論の中で逆説的にそのことを述べている。

私は批評家諸氏から私の作品についてただの一度も誤解されたことはない。威張っているのではない。悲しんでいるのである。一つの作品に対する批評が私にとって全くの誤解だと思われるときでさえ、その批評家にとって正解であるはずだからだ。

冒頭の語で始まる批評「批評と私」は雑誌「三田文学」昭和四十三年六月号に発表された。この中で椎名は批評家諸氏の思想的立場を明確にして欲しいことを再三に亘って述べている。『懲役人の告発』は何を告発しようとしているのかの問題に立ちかえると管見する所、この問題に明確に答えている批評家は居ない。唯一人、作家の野間宏が椎名麟三全集二一巻に解説として書いている。彼は日常性ということを強調し『懲役人の告発』の次の部分を引用する。

運転手は秋も涼しくなりすぎているのに、厚いワイシャツの袖を折り返してまくり上げている。その裸になった腕が、棒のようにときどきおれの右腕をたたく。彼は左手に箸をもっているのだ。むろんおれたちはだまって会釈しただけだった。ここは食うためだけの場所であり、話をする場所ではないからだ。おれは味噌汁の椀に口を吸い寄せられ、箸先を焼いたアジの干物に翻弄され、どんぶりはおれの顔をその上へもって来させるのだ。これが人間なのだという気がふとした。気がついたら隣りの運転手は、手品をつかったように消えていて、労務者風の男が、意味もなくカアキイ色のズボンの両膝のあたりをしきりにこすっていた。（『懲役人の告発』原典P8）

これを告発などということは出来ないという主張は成りたちはしない。これが私の日常性のなかの告発とよぶものである。そして椎名麟三がはじめてこれを行ったのである。それをこの作家はこゝに実現してみせたのである。[注]（と野間宏は云う。注西谷）

流石に、野間宏の見方、日常性のなかの告発の発見は見事であると言わざるを得ない。しかし、『懲役人の告発』の最後の場面の観方が私の敬愛する二人の評論家とは全く逆である。二人の評論家と書いたが、その一人は椎名麟三の高弟である高堂要（故人）であり、もう一人は佐藤泰正氏である。野間宏の観方は「『おれ』の見ていたものは、今日の、日本の、そして世界の空である。新しい死の形の前に『おれ』は、ただ一人おかれているようである。」（前掲書）という。二人の評論家は野間が観た空に〈死〉ではなく〈神の世界〉を観るのである。

五、モノ称について

踏切の途中で、警報機がおれを追い立てやがった。鉄砲玉のように早く走れないこの肉体の頑強な重さ。後ろに遮断機が降り、やがて列車の進入して来る轟音がしたが、おれは振り返ってもやらなかった。そのかわりというわけではないだろうが、何か漠然とした絶望をおれに残しやがった。原典P9

その機械は、高速遮断機というやつだ。外光がやっととどく広い工場の隅にそいつがいるのだ。……一ミリでも間ちがうならば、ゆがんだ橋ができ、ゆがんだビルが建つというわけなのだ。そこには

おれの自由はない。（原典P16）

機械どもは、今日が定休日だということを知っているのか、朝の微光のなかでかたくなに自分自身のなかにとじこもっていた。その周囲には、人間どもを寄せつけない冷たい拒絶の雰囲気さえただよわせている。それぞれの鋼材の山も物自体の重さにかえって、大地を引き寄せている。これらのすべては、人間の世界から遠くはなれ、神に似た世界のなかにいるようだ。全く彼等は、人間どもが泣こうが血を流そうが、一切知っちゃいないのだ。（原典P41）

一九六〇年代後半は極一部とはいえ、モノが溢れ始め、そのまま行くとそのモノに使われる人間どもの姿が浮き彫りになることが予想された時代でもあった。その様子を椎名は逸早く小説に取り入れたのである。野間宏は「自然と人間」[4]を長々と引用し、解説二十一巻で意見を述べる。それを引用する。

ここには椎名麟三の自然についての、それ以前にはまだ、明にされることのなかった考えが提出されている。それは自然と人間の同一性という考えの上にたってだされており、しかもそれが小説論として出されているのである。（中略）私は椎名麟三のこの考え、また小説論として出されているその自然論に、今日、私たちが必要とする非常に重要なものがあるということを、明にしておきたい。椎名麟三はすでにこのとき、現代文明の危機の問題―自然への問いをそのうちにつつんでいる現代の危機に直面することによって、近代ヨーロッパの自然論を根本から見直し問い直さなければならなくなった時代にその顔を向けているのである。（後略）

この問題はその後どうなったか。椎名が亡くなってから約三十年が経つ。その間にバブルが弾け不況が襲うようになり、さしも経済の繁栄を誇った日本も、「モノ」に支配されることは逃がれられた様である。これにはなんといっても人々の英知による所が大である。しかし、これらは全て眼に見えるモノであり、その後眼に見えぬ形のモノの支配が問題になっている。つまり、酸性雨の問題、CO_2増加による温暖化の問題、オゾンホールによる人間いや生物達の死の問題等々、これらは直接人間の眼に融れるものではない。が確実に人間に害を及ぼすのは目に見えている。

六　結語

それにしても椎名は最後になって厳しい世界を創りあげたものと思う。折角、芽生えたと思われる長作の福子に対する愛も、叔父の長次の福子殺害によって消え失せて了った。確実に言えることは『深夜の酒宴』にしろ、『永遠なる序章』にしろ虚無を感じさせないのはどうしたことか。『永遠なる序章』は限定された〈生〉とは言え、めくるめく

〈生〉の喜びに溢れている。このような椎名の最後の長篇が『懲役人の告発』である。自分の為に書いたというのが専らの評判である。椎名麟三の読者が居なくなったことは前に述べた。作家にどこまで要求するか、難かしい問題であるが、もう少し頑張って欲しかったと思うのは私一人だけではあるまい。とにかく『懲役人の告発』は偉大な失敗作であると思う。

『展望』紙上に『深夜の酒宴』を載せて椎名を世に送り出した臼井吉見は『安曇野』（一九七四・筑摩）五部を書きあげるが、その最終章で、若手で気になる作家として椎名に触れ、「椎名麟三がそれだよ。彼にはじめて会ったとき、作品は無論のこと、姿といい、表情といい、もの言いといい、文字どおり、虚無から来た人、という印象だった。その彼が、うつろな繁栄のさなかで死んでいったことを思うと、まさに戦後を象徴する作家だったと思うナ。」と述べている。椎名は生前、彼の所に集まる若者たちに夢と希望を与えたが、最後の長篇では失敗したというのが私の判断である。

注

（1）椎名麟三全集一～二四（冬樹社　昭四五～五四）

（2）佐藤泰正『太宰治・椎名麟三』（翰林書房　一九九四）

（3）高堂　要『椎名麟三―作品に見る―』（教文館　一九八八）

（4）椎名麟三『自然と人間』（雑誌「批評」昭四三年　冬季号）

A Critical Essay on Rinzo Shiina (II)

——From *Unga* to *Choekinin no Kokuhatsu*——

Hiroyuki NISHITANI

Unga is a full-length novel written a few months after *Utsukushii Onna*. After finishing *Utsukushii Onna*, Rinzo Shiina wrote *Unga* for reasons which remain unknown. *Choekinin no Kokuhatsu* is Shiina's last full-length novel. It is an extremely intense work in which the hero, Chosaku, runs over and Kills a twelve-year-old girl and spends the next twenty years paying compensation for the incident, resulting in the complete loss of his freedom. He is forced to live as if he had been sentenced to prison. His ordeal is like a living death, and it is uncertain as to whether he will make it or not. In addition to this torment, his love for Fukuko, which had blossomed after great effort, is suddenly extinguished when she is murdered by her uncle.

Hope and the pursuit of dreams are nowhere to be found in this dark novel. Because of this, it must be said that it is questionable as to whether or not it can be regarded as a commendable work of Christian literature.

Key words; Prisoner, Fukuko, Chosaku, Chojii, Chotaro, Love